



六樹園
飯盛著

近江縣物語

卷二

13
2893
2



門へ 13
2893
巻 2



昭和九年
七月三日
晴末

近江縣物語 卷之二

○くさばくり

近江國なる橋の安世が歌よてハ梅丸がせし一後ハ
あつて被しむとて月比を色一なるたある月一村俄
しりきまき伊勢の国より盗人とも多勢にて知れせし
資財道具と持えらび子といはれた老方を負く東西は
ある安世のむとより金銀の類ハ穴と掘り深く埋め藏
けりかとり用意して置つれど俄にぬぎびへたひん
かへせきてよまのあつとあげてさしきられおのまゝ
あましてられんぞとてカよまハ掛つれど寡ハ衆に敵すべ
くさばくりはあひてらすでおらんもあつくは恥ふやかし

近江縣物語

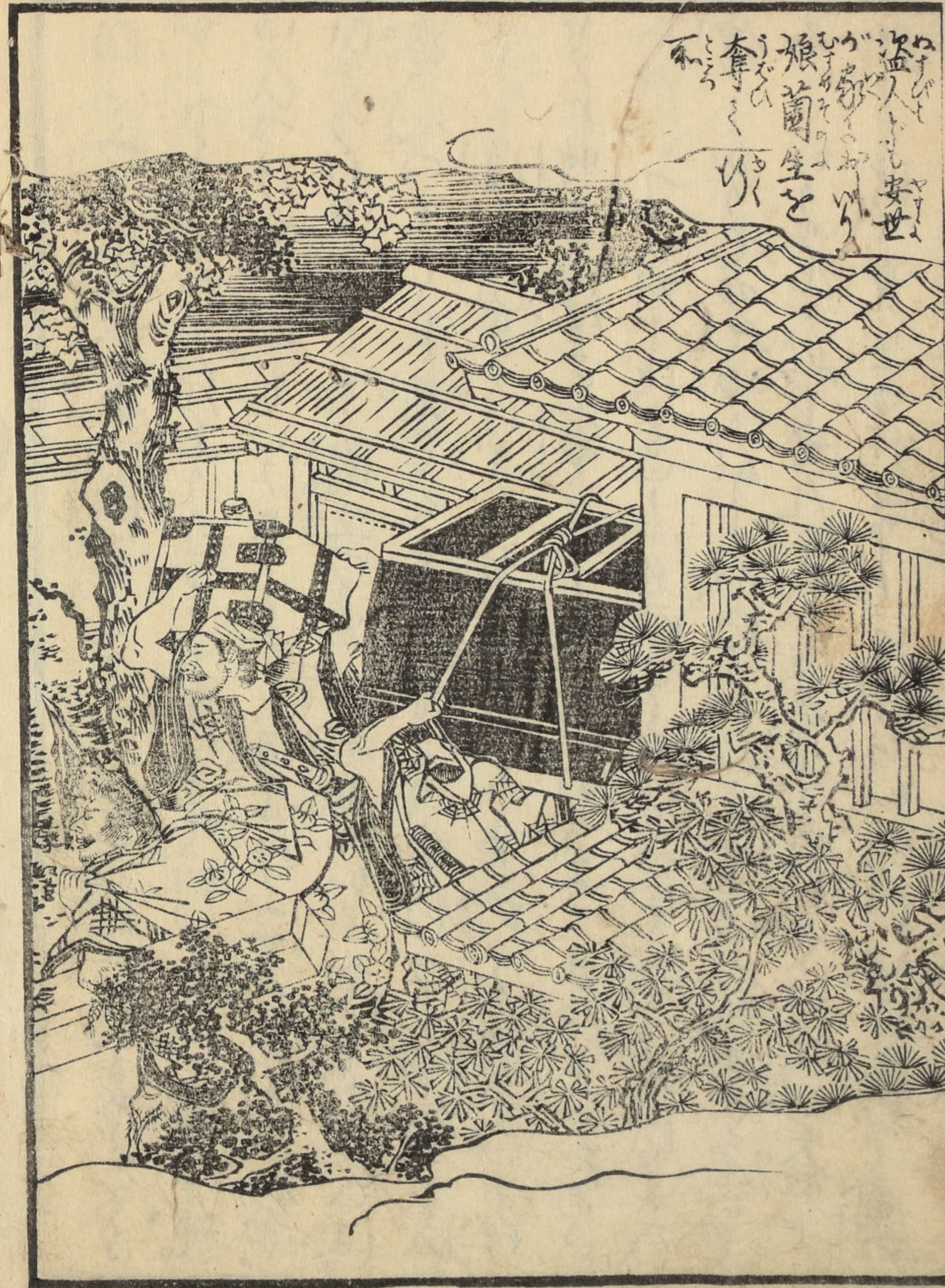
陽明
圖書

ひとまがらぶがしらんよあうしひて妻がどとんとて裏
乃方より出てを落申きりの菌生ハ此時例乃軍やありなるが
かいら心や一思ひけるなごとい外出るも女の足あて
えうくあくあゆむ事たはするも必ぬせびよよらるる
あうきあやわらひませにいぞひとりの計をたげうまう
命ぞもち貞をも全くわして再夫にめぐりあはす
思ひめづりして父がきてをくさる薬草の中より巴豆とよ
茶とよりの出く面より足まきてびつせつたお塗てその
まゝあつが部屋さうらたびてを殴のりりるはらばははあせ
ひとたむしくとわまりてお世が家へ入る見たり
男女一人もえび瓶袖かゝあきたの財とてつゝ見とて

ひつろく奥さへ踏ぞろろ菌生が所よりうき
をえりたるしにあうこそあせとて引おろして腰の縄
ゆひつけておむいふすまうし毒さげぶと身はりたり
いまつれゆんとぞ菌生つは病者なりかくおせをとりは
漁人つくぐと見えぐや病者りり歩行おろゆぐぶ
とて肩へひきかけちぢりたてりあつる菌生いより
あれた時より深き窓をわらをれあつるまき風がたわ
らびいつまがばもしめろさむくつるあつるさびす乃
倭もあつてあつゆれ心のちいさうらつびくもあつ
あつらさんせんせんまあるとて観音ぼらんと念ど
祈りけり身をあつてつらちぢりしよきるあつる國の



盗人よし安世
 が家におり
 狼蘭生と
 奪く
 不



左衛門梅丸をどりけりしあ、郎等がりのにまいたる
 計した瀨門同をりてお、命と盗人のちま、失
 けりしと、いふさよ、ちとど、今、悔、ひ、都、いた、
 と、く、を、兵、藤、都、も、同、一、治、人、も、入、ぬ、て、粮、糈、し、
 り、一、か、一、先、げ、大、事、や、告、も、ん、と、そ、い、ま、き、罷、下、り、ゆ、た、
 都、の、事、い、く、も、ほ、り、や、び、り、な、左、衛、門、の、仕、は、や、り、て
 り、二、十、年、に、成、り、ぬ、さ、い、ど、か、む、り、の、大、事、ど、う、と、見、ん
 道、理、や、一、今、り、都、は、帰、り、の、ぼ、り、程、光、河、原、ち、り、り、
 合、せ、帝、都、と、守、護、一、奉、ん、ん、か、く、用、意、せ、し、り、と、
 兵、藤、あ、り、と、り、て、伊、勢、近、江、は、屯、り、の、盗、人、も、何、萬、騎、
 と、り、し、數、も、た、れ、ざ、と、ば、け、や、が、り、て、通、ん、ん、と、か、る、べ、い、

一、思、慮、と、か、く、一、あ、る、づ、ら、の、一、郎、等、ど、も、
 かく、旅、乃、空、よ、あ、り、て、物、の、具、と、た、用、意、せ、ん、を、敵、よ、
 向、ん、事、計、や、ま、に、心、り、あ、る、く、爰、よ、止、ま、り、あ、り、て、
 都、の、や、う、と、も、聞、せ、り、と、諫、れ、れ、ば、一、も、い、ど、も、ち、
 と、ど、留、り、ぬ、が、物、忘、れ、る、時、や、り、け、し、バ、街、道、も、人、の、往、來、
 た、て、て、都、乃、お、と、つ、ま、か、ど、い、ま、き、や、り、か、一、左、衛、門、云、け、る、ハ、
 い、う、ぞ、さ、へ、ま、ん、と、は、り、て、都、の、さ、ぬ、と、問、せ、を、と、あ、り、
 ね、り、た、れ、ど、う、の、ぼ、せ、つ、ま、い、べ、き、と、い、ふ、郎、等、と、り、同、と、
 同、と、見、あ、を、せ、ら、る、の、と、い、ふ、し、行、ん、と、い、ふ、者、も、
 梅、丸、す、と、出、く、某、申、き、て、都、の、さ、ぬ、と、も、う、か、ひ、て、帰、り、
 は、の、ら、ぬ、と、い、ふ、と、だ、瀨、門、乱、軍、の、中、存、亡、お、ぼ、ら、り、



梅丸
左門子
別
都へ
のり
か
不

江戸系物語卷二



江戸系物語卷二

無用なりといふも免れぬ梅丸あがらむしひる某
 のぼんふ必定つがききありきくべくい内んやせし
 しつた漸門さうをてたぐねつまたる袋とり出て
 何と安世とのやんも恩ある師なりと受けづ
 かるくおをゆやけついでよありの尋ておきおはる
 せば知がこのしん日比をふもくくくく必尋あひ
 来しといふ梅丸より旅まひあてお乃明をき
 旅かここと出都さうしてそのぼりりちねだ
 旅いさきさしひあるがく盗人もの山野はありのて
 ある時たれはさくする人もさうちびくおすごき
 事しつをいさありたくをくる乾飯をいささきあ

食とれおられる社をさやどつからして
 美濃國某の郡にをさる目すでも暮かりはらいつ
 こにやどらまといと見さすす本林のけよ大なる寺
 ず髭おひ眼をさうき男どものいりき太刀をこ
 たくるがいくとさくあかこはむとあさり梅丸を
 見るよりほくしとよりきて太刀をませつけておのれ
 何者ぞといひ聲つきぬのひくよとあさりびさ
 ぬけびとの住とらるとんづきしと手をつきておのれ
 尾張の國よりすわの田樂をい都よとらある者のゆひ
 やまひはかひていと承りておのれんずる前日のさ

ゆを宿りともばやと存りて思ひむいど侍りてい
何ぞれゆゆとや蒙りてなるといおす人うち
守りもくたちあも者なき向ひてやつ田樂を
つとすもやここのの宴席はこなたまなむ物あり
めり入る夢ごある人は告すこんとつばさしあがり
まのこらこらして縁のここのぼる梅丸うち見まを
に鞘にまらるる鉾長刀かどあきし膝よりつけめり
盗り取る物とらるる皮の重袋やその物もつと
かぶるありゆりひつけぞとにせ取りあるとて
まきくくもせりあて奥の方へ誘をれて入て見
れば横坐り賊魁とおほくしてげつまごげあが

首
あはねは福きりてきりそのやうたけ高くせりけあるその
ぞい左右よかきびと酒のきり梅丸一禮して坐りけは
横坐りぬびびとらるる若者之田樂はあは
そのそきりかきなるぬびびとらるる若者之田樂はあは
いひけぬすもりる。笛鼓やとらりおておひひくもあ
るやも梅丸いさむははらぬ扇とりてたちあがりてあ
かきくもひらり
枝さかき吹儀のきりさきり
風吹あき夕ぐれあき波たうきよすもあ
とどれとらまひらでけさあはらぬ人ともあ
あげてあをれいも舞てらるるあはら上手にあを

とほめしきとて興ずり此舞のやりられたあ
 めでけんつとあひまはのぬひびとのまらほひつとあざりて
 ぬすびとく一丸ハ三輪の神とおぢくしてとて巻のい
 のひとぢくよふとどのとをたのい
 とつひてとつと舞る物とを燈臺よひきうけて横
 とぬすだれやとてぬひびととていつひてはて
 けりてかきつとつ後庭乃ぬす人へはく梅丸とほめてりひ
 をハ汝事一のぼんずふハ我もぬすのよありて道を
 ふらばてあれたやもくとつゆんとかつとふひのむきで
 物とあまことつとて焼きかつとちひさきれを

ちげおつとつとハ我もがらの割符とまし持てとん
 一いつと行ても汝もまごまのハあつとつと梅丸手
 たりはげてから時はあつとまはる物もつとらを
 とつとつとてかつとつと酒宴も事とて
 ぬすびとくあつとつと臥ね梅丸もつとやのあつと
 寝たりとれどいもぬすれを起つとて庭乃方よあつと
 かよ女乃泣聲のつとれを何やとて何をんとうかひ
 一とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 屋うに見ゆとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 うつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 所あり物とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと



行工系勿言



江戸景

しふ所ところ犬いぬ相違あひだせりいりある事ことをどしこを女おんないうぞあること
 めひやんやぬぬこまい色いろ一青海波せいがいなみの夜よいまませせあひてあり
 ぬんぬんのこがれておららつれたかの内袋物うちふくものをバ大事だいじの物ものとあり
 ぬひぬひく。昼夜あや内身うちみををちせあひづりづり一をとりし梅丸うめだま其
 あかあかららななありとてざららありかの袋物ふくものとり出だしたば女おんなち
 見みくくそれいぬ方かた乃書かきの中に扱あつかせり。禁かぎとせりけし
 物ものいれも袋ふくめていぬいぬちててせりせりののふらふらんんててぬぬぞ目めくらり
 きりていひひききてこころぬぬととりりのの紐ひもの封ふうじぬにははいいて
 ひきひきををかかししりりてて見みききバ内うちよよ又またいいととややるる物もの包つつてあり
 箱はこひひけけババズズママソソヒヒ一一またまたががつつよよ菌生きんせいが詭異きいの祖冊そふとも
 ぞがぞが本もとりてつらつらりたる。禁かぎよああををせて入いれおきたるなり。梅丸うめだま

箱はこひひけけババズズママソソヒヒ一一梅うめの哥うたを出だして見みせ
 くれくれも女おんなうちうちららひひくくそれいぬいぬの春はる常人つねびとのりりらら梅丸うめだま乃
 枝えだよよみみむむむむびびつつけてけてむむくくつつららんんてて紙書かきててああららしし常方つねかた
 乃なむむががらら後ごく返かへ一一ややるるととててよよまませせるるなりとといいちちててハ
 常人つねびとがたたららててんんららひひるる事ことふふををいいれれ親おやしたたののももははるる人の
 仰おほせせののりり都みやこへへののげげありあり道みちををががりり師しあるる人ひとかかららびびはは菌生きんせいが
 ゆゆくくへへももたたづづぬぬを見みんとといいくくむむ女おんな方かたははぬぬくくこの品しなをを身みよ
 つけてつけて持もてておおををせせばばそれそれををああららにに尋たずねねさせせままししららふふ心こころええつ
 かの一品ひとしなをを證據しるしとしてして身みねねてて見みんんががああらら今いまより
 尾張おわりの國くにああつつことことををててゆゆくくづづ一一ぬぬれれららりり何なにああららぬぬ盗賊とうさく
 もも何なにららぬぬづづいいややせせるるづづ一一ぬぬれれららりりいいそそぎぎ物ものせせよよととききてて

あぐね丸出く手にけり竹垣を破り女が手とり
多引いづ道を教ておとまりつづれも爰ありて
こののまじりかんとそやがてすが笠うちぶりすそ
引上げて都の方へとせいとまき行る

○山のとね

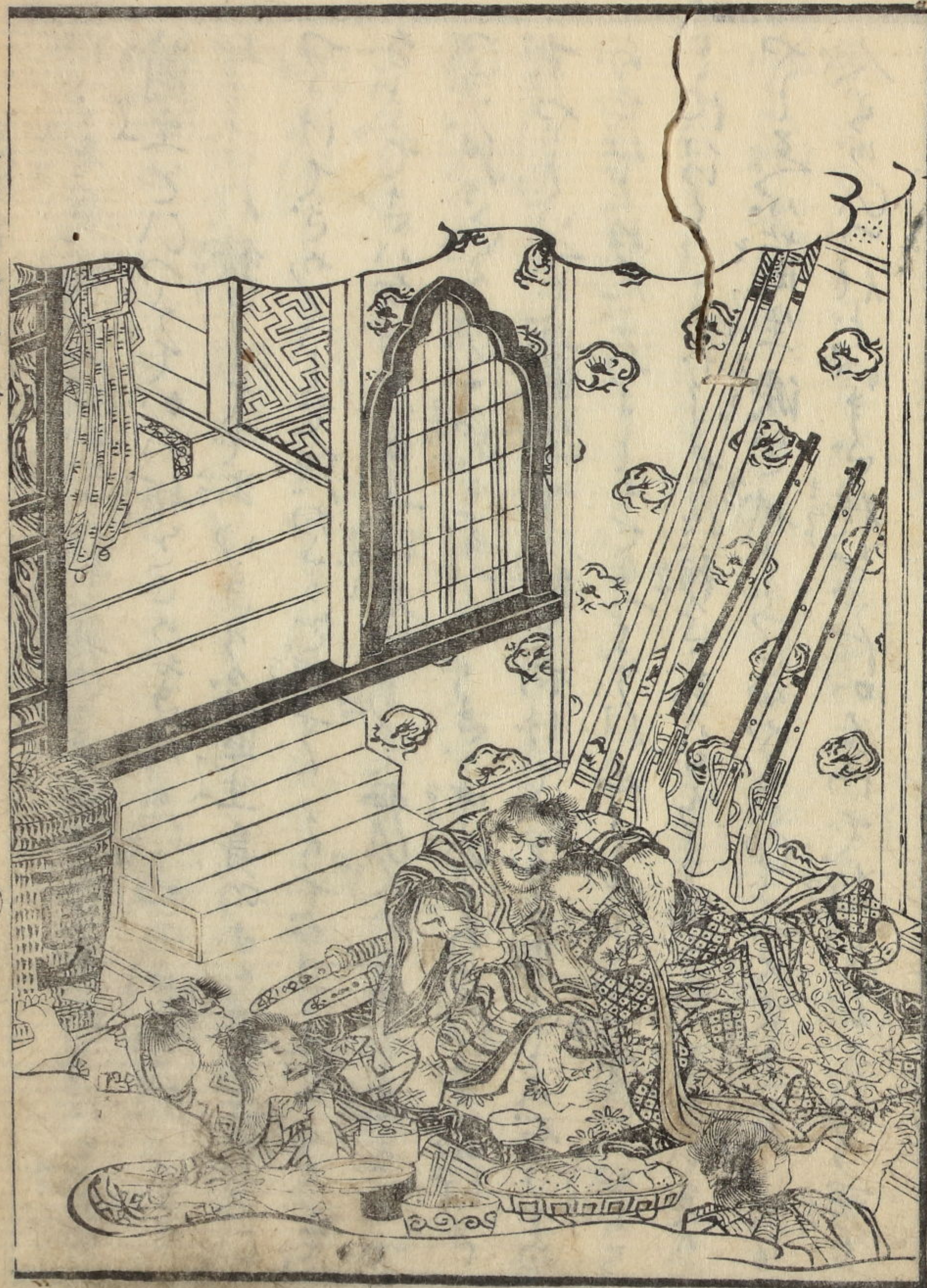
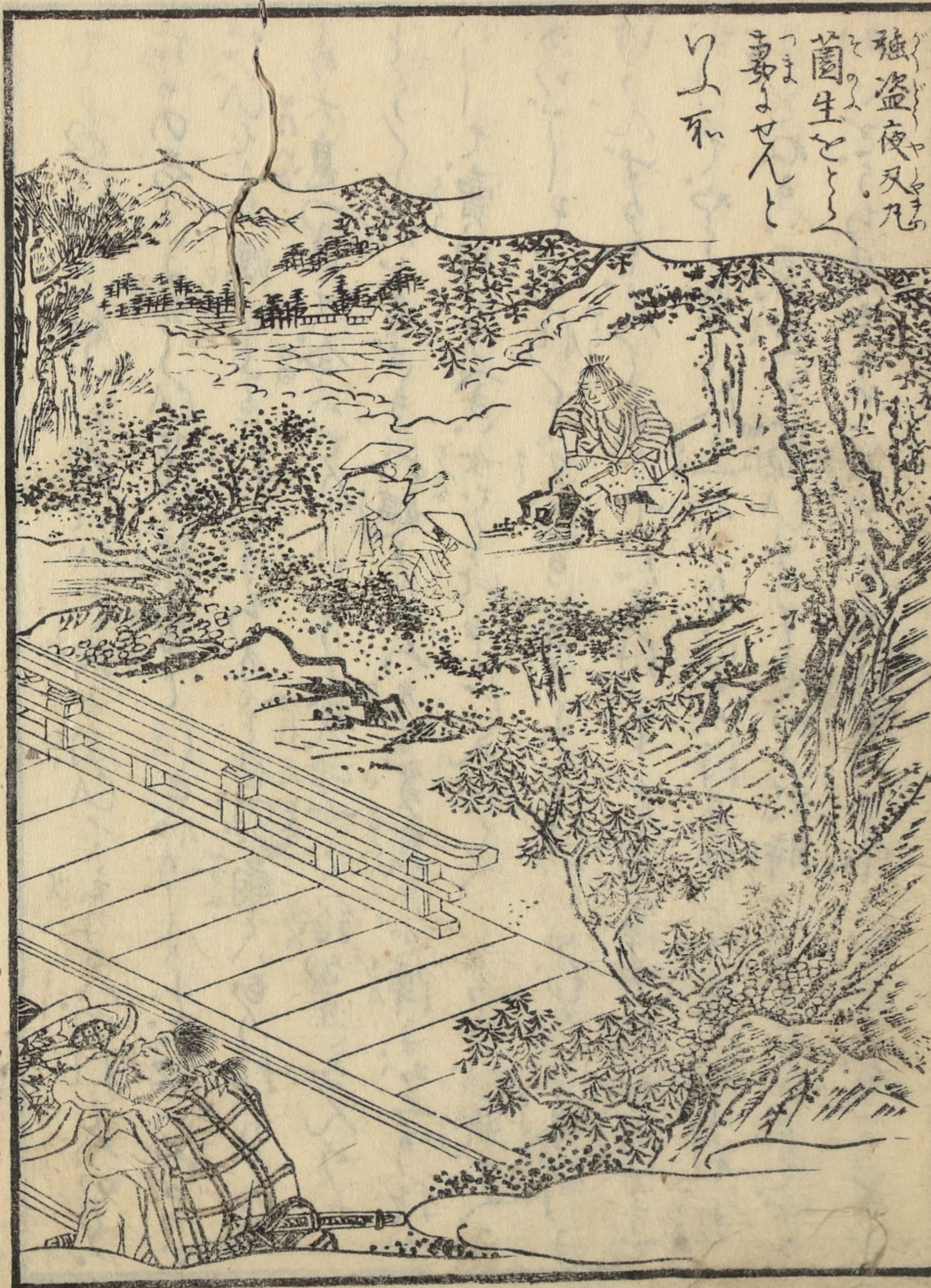
あに夜又丸とりぬすびとりの袴が羽羽異したの
たる者そりりる近江國よりて大寺の法師を追出
まづかきそ六のわろし成てあすこの盗人をとぞ錦綺乃
あね座し山海乃珠味とあつちほき海にぞりてを
住のりりるのひ像よせも女を庭よすあつて夜又
丸縁よ出くあつちあつち中へ老るゆりる姫あつちをつけて

何者そととを姫泪をがててづうら山城のくにのからぬ
かうに住る者あつちが歳をけて命も何うせん
くいらにもとせまひねらよ夜又丸おのれなく持る
きくちやどいづかき置るごとく世とひ
ちつひてさる山里に住る乃かたうをさくをい
とりの夜又丸姫をよを見らにあつちる布乃衣ま
をれば此姫人づいあては見ゆせど衣をよいやきこの
こ見たりくやつも申らね者ありてさづねりぞるひよ小
大の置イ多衰丸陣におりやるべとて引さちや
出ぬねねはよらる女ハヤれたしをけ女をりの外
やまひはあつち女一人さつちをりけ夜又丸をひいて

口おほきく鼻の売はさるるまに向ひく鬚がら見せしき
 男がぐらいうきいろあのみあてあつたればけき女ありし
 けり大まららびてさるめいそ見せけりこくひき
 けせしのひつけやるやそおて集る女とを白きあや乃
 衣うさぬてうそぎにハハハハのいろのけりやばやうなれは
 着て人ぐらあてあるが袖ハ液はぬれひしてかふくとそ
 いできさるらあしやん安世がむそ菌生あてありる顔手足
 かどの腫てんゆの盗人又手しせド乃計どあてすべく
 身のうちよ巴豆とあしぬりたればがあやしき病者のさ
 とい減まるるやりの夜又丸うちさるりけあはあぬかち
 かねしてそあは涎かきうたしてはのりさうてがうらあけ

よしひきうらあだるを見せはあてあかした腫けり
 てたゆげやるるまにのきはたせりがれで病者しうひかく画の
 腫るるやうがらうらあ何をるのふとあもあどあハ
 やがて愈ぬべし此女人よりけりけりけり置て裁る
 ちうげあさげけしはひやん先うたにのぼせよしひて縁
 のぼせすりりてたをれかると女うげある声あつたうら
 ちとやるやまひよあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 りてうらたええええええええええええええええええええ
 せええええええええええええええええええええええええ
 こいひきびきびきびきびきびきびきびきびきびきびきび
 はずびや舟のしひてはあは夜又丸うらあ心やうく

強盗夜又凡
蘭生と
妻とせんと
り下



けよ打見返りつがづりして奥のくらめを入るのありける盗人
 菌生といつてそのかゝの姫をこめおきたるひよわの戸をひらいて
 おいれ鏡をてて出ゆきしる菌生身のおぢきかゝる思ひ
 つけてさめくしせられぬを姫すりたりてたぐはけりしるを
 むどてさへおげきめよ流刃ほどくぬ人の妻と成りしる
 べきはふいひは免まひつづき中のおらうびといおぼさ
 ずやしづかぬ菌生や頭をたけていふをぬるとはぢりまぬ
 うせぬぞぬんぢりまをせまふらぬあはれをどつら申し姫も
 とはいらぬ事し世後親さあはらぬしほせも男りあまり
 やしき菌生涙を拭くつらやもさしむ又夫と定りたる
 人もあひつれどもいまだ枕をたがふ所で行けりして何り所も

ありぬまひしりたおとしの事やまも住みひしりつづくと
 同し神崎の里しらすと流しす姫脊をさでさすりしを
 つらとせも櫛の身にすもろくも事ぬぬとぬまはりたり
 いしるはれがむらゆくかきつづらぬもぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 おもせとしくも菌生手をあせてたぐ姫ももいしりし
 事にすかざるやまひよがのひしりしをいさや盗人
 せちるぐとまきてはちりしおひしがていしで流し
 汚らびして夫もあがりのあをぬんと思ふははらりし
 まうけてかゝ病者のかちとありしはしりしをぬぬぬぬぬぬ
 物語あるを姫手をもちてかゝこのぬをぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 やうなるぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

近江系物語卷二

とり出てお守りびとが申しよおげおきて、まらるゝあいの袴だれの
君よつろまつる。今中のあてい。吾君の仰せよ、我陣中物
かく入らなくておとたびおまき法師あつておてまらんと
のまよつきておのまじらか。披しりおめど寺の法
師を、皆逃うせて一人もある事なし。此法師がなすは
物書ぶられしをひきつれておあつて存て罷つて
てゆつてを二人のぬひびとめとりをえんあをせてさうて
梅染るもの人あてを有た。さうておておせとて
加納が梅丸おまじらして法師が手をとつて引
はつて。法師がけりまひひて、足もたす。梅丸けり
あつてあつてひいて、あつて。法師が手を肩まかけ。

ひきがづきてゆく法師ひれまがらぬひびとの書記は
けり。ただおせくともぶを三町をり引ゆきて声か
たてしつひく法師を地よす急てかたりる。おのいまこし、
ぬひびとあていを。故ありて都へのお者あてい。大とこの危
を見ゆるより。法命すひまおせん。かりよ。同敷の者と見
せ。ただおりてゆかりぬすびと。もきる事ハあつて。あれ
どういそぎゆをせま。つて。法師を。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
事には。割符やく物を。あつて。あつて。あつて。あつて。
のやすを語りて。盗人よりひつろ。あつて。あつて。あつて。
てみよ。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

おぼくは、辰だの辰、西念と申す世すてびとにて法師が
菴あより一里ごりの山に具一奉りて、こよひ一夜とて
まのせむをいざとて、とて、まのせむをいざとて、つれづれ
てゆく、ちて、畔とつた山をこえて、かこに至りて、見れば、
なる山のりふちひさく庵つりてあり、何よりハ松杉など
ひまもねくおひき、うた外よりハ菴のやねも、辰
はすぐれたとき道あるをわたりて、むひりの方へ入て、鉄
ひらきして、ともあひひつ。法師火をうらて、まのせむ
あつて、まのせむをいざとて、ひさく庵のりも、変り、飯を、
盛り、まのせむ一物まを、まのせむをすゑて、出、一、梅丸おひ、
ぬ、ぬ、て、か、に、預、ゆ、と、飯、ま、ま、を、り、西念ハ、首、

懸る一品を、法師のまのせむ、すゑ、終て、火のほとり、
ありて、まのせむ、まのせむの命たすりの事、謝、奉、ま、ま、
もゆを、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、
事、ゆ、て、都、まのせむ、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、
りて、都、まのせむ、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、
くり、まのせむ、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、
らて、まのせむ、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、
らせ、まのせむ、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、
も、近、く、まのせむ、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、
供、あ、て、都、まのせむ、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、
り、ゆ、を、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、辰だの辰、





江戸原物百景一
 蘭生ぬまへ
 さんざら
 めくろ
 老る姫
 ころり
 あつさ
 かり
 びり
 不



志多ふいびある物ありていふとまを法師水晶の玉の如た
 涙をたらりと流しておのれつらき泣かぬひがつかま
 て世をいつりひひと思ふに観音の夢よ入のひく
 かの一品をえてより心をあつた免く今ハ随分乃修行
 者と成ていふれいながくあまき物語ありて又も夢
 ゆをちあがらうとあひつゝむごやまをせ多くとて枕より
 出てうすうするあす候却てうらまを法師もがくまに
 よりてあぬおれを候とあまりて出さんとする
 法師もあむ。流うそひするをむじしをゆび梅丸
 ひきそひし。あぬたすがら盗人どもの居あつた所
 何れどかの焼くるの礼出でて見せつゝとあつとほりて

都を着る。都のつゝ武士ども昼夜をこころ
 けいれあつて用心嚴重かれをさすぐんぬすびと
 ぞりいひりこぼらうのあつりに行つてるに家系ハ
 えび盗人ども火をあつらる。あつらりたあつ野と
 成て物とよまへんたんとびそらつらあつひおるん
 夕暮のはじ七十針の羽杖すすぐりたるがまわひより
 梅丸聲をうけていふ。老人嘆嘆の左衛門のくまの
 跡ハいつくぞとこを老人つゝくして見て見おれまわ
 せぬ人のがのこつらことをおはつらる人ぞとよあおれ
 た衛門殿のゆりちよつら。今もあつていふ。まをいをん
 公羽ハむせあつらる。あつらるのこつらに奉るよ出たるゆり

さて常はちり入てはださむちのんくはくありていと
をよき人よ出あひりる水の方はいふ成あひしとくも
公羽あえられも青あておん人の水く頭りて持りて
あうかかこの敷うげは葬てあてとふとあひあ
入てえはよかたより塔婆さくありらち見は先
涙ぐもくもた酒のどの仁徳をま一人あておん
とどのあまし前ゆる人のかおをびありあま
し事あげきもたまりありてひれかしてやみ
かしを西念の火うちそり出くた紙ある香うけ
らしやとどつとむぐ衣の袖をあげりる梅丸老人
しむひくばちり入来りおんびとの名をきあり

あつやとくを老人うきにその名をとりて子細ハ其夜
箱の脊門のて俄は物さげくひつればなまてを
出てえりバ鞍かきる馬のくちとりていりり男のま
ておのれをまていふ此馬よをすべきあやあるしや
ゆをがそりしに刈りる草もとり出てつりて
又酒あつばりせしやてはせんくやく神は奉り置
瓶子をおりて出てゆを瓶子のさびを我口よあ
ていしくこのまほりて息まいて斬るりしがす
はわぎぬし申て馬乃草をむねとすのこま尻けて
ゆひしがしが申てはあひ我もがらげりる左衛門
つある者の家よりち入て寢ぶらうをひて今時人とす

近江縣物語卷之二

とつりつ。此^{この}はのぞに。安世^{やすよ}君^{きみ}。菌生^{きのぶ}の方^{かた}。はゆ^ゆくへも。
尋ね^{もと}むせ多くし。西念^{さいねん}がすむ。後^{あと}ひて。又^{また}近江^{おうま}の
方^{かた}へし。ま^まあ^あく^くり

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

近江縣物語卷之二

通新石所

物記

通氣石所